

令和 2 年 5 月 29 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K12567

研究課題名(和文) 発達障害児の親のメンタリング過程により構築する包括的ケアプログラムの開発

研究課題名(英文) Development of comprehensive care program constructed by parental mentoring process for children with developmental disabilities

研究代表者

西嶋 真理子 (Nishijima, Mariko)

愛媛大学・医学系研究科・教授

研究者番号：50403803

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：療育機関に通所している未就学の発達障害児の親が感じている困りごとやペアレント・メンター(以下メンター)への相談希望とその関連要因を調査した。児の行動上・生活面・親自身の困りごとは8割以上の親に見られた。メンターへの相談希望がある者は、発達障害の診断がある、相談相手との人間関係の不安がある、自身がメンターとなる意志がある者に有意に多かった。また、4回のメンターへのグループ・インタビューを質的に分析した結果、メンター自身も相談活動により達成感を感じ、わが子との生活に肯定的な影響があることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子育てに困難感をもつ発達障害児の親にとって、日々の生活面、行動上の問題に対して、同じ立場の親からの受容と共感は大きな助けとなる。今回、未就学の発達障害児の親がメンターに対してどのようなニーズを持っているかを明らかにすることができ、相談したい親は、自身もまた他の親の相談にのりたいという意志があることに最も関連することが初めて明らかになった。未就学の発達障害児の親である相談者に対して、将来、メンターになることも視野に入れて支援すること、メンターからメンティへの支援を通じてメンター自身の子育てに肯定的に反映されていくこと等、包括的ケアのめざすべき方向性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：We investigated the anxieties of those parents of preschool children with developmental disabilities who go to development support center, and the factors related to consultation requests to a parent mentor(mentor). More than 80% of parents' responded to the questions concerning difficulties with the child's behavior, with daily life, and with their own anxieties. The person who has the diagnosis of the developmental disorder, the person who experiences uneasiness of the interpersonal relationship with the consultation party, and the person who is willing to become a mentor, all had a lot of hope invested in consulting to the mentor. Four group interviews were conducted with mentors and a qualitative analysis revealed their experiences and challenges. It was suggested that the activity as a mentor had a positive influence on the life with their own children.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：発達障害児 親支援 ペアレント・メンター トリプルP

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

発達障害児へのアプローチは、教育では特別支援教育の一環で、保健医療では早期発見・早期支援・療育が行われ、一部の市町村では発達障害に特化した窓口が置かれている。しかし、領域間の連携や専門職の不足、障害の分かりにくさ等により、切れ目のない支援は難しい。

子どもの育てにくさは、親の負担を大きくし虐待の対象となりやすい。発達障害児の親の多くは育てにくさを感じているが、早期に適切な支援を得ることで二次障害を予防し、良質な親子関係を築くことができ、そのことで潜在能力が発揮しやすいと考えられる。

汎用性のある尺度開発により乳幼児健診における把握体制が整いつつあるが、現実には思春期以降に現れた問題行動によって初めて障害に気づく場合も多い。健診で発見された場合でも療育機関等への紹介やグレーゾーンに対する継続的な支援は、個々の保健師の判断に委ねられるところが多く、親の理解や受容には長い時間と高い支援技術を要する。今後は地域保健・福祉・医療・学校等が連携した支援体制の構築が必要であり、専門職が子育ての困難感を敏感にキャッチし、親子が専門的なサポートを受けながら、日常的な問題に対しては同じ問題を経験した先輩の親からの相談支援や学習を通じて、地域で解決する力量を育む体制づくりが必要である。ペアレント・メンターの取組みは先進地で始まっているが、プログラムの標準化や効果については明らかにされていない。

### 2. 研究の目的

前向き子育てプログラム(トリプルP)を修了した発達障害児の親や保護者団体等で保護者支援の経験のある親らが、ペアレント・メンター養成講座を受講してペアレント・メンターとなり、他の発達障害児の親に対して継続的に相談活動を実施し、その支援内容と経過を分析することにより、メンタリング体制の構築と発達障害児とその家族への包括的なケアプログラムを開発することが本研究のめざすところである。

- (1) 未就学の発達障害児の親に対するペアレント・メンターへの相談ニーズやペアレント・メンターへの相談希望と関連する要因を明らかにする。
- (2) ペアレント・メンター養成講座を受講してペアレント・メンターとなった発達障害児者の親が、他の診断後間もない発達障害児や発達障害の疑いのある児の親に対して継続的に実施したグループ相談会での相談活動により、ペアレント・メンター自身にどのような体験が得られたかを質的に明らかにする。

### 3. 研究の方法

- (1) 児童発達支援センターに通所する3歳から就学前の発達障害またはその疑いのある児を育てている親180人を対象に、無記名自記式質問紙を用いて調査した。調査内容は、基本属性、現在の困りごと、発達の気がかりが生じた時と子育てが一番大変だった時の児の年齢、メンターに関する意識から構成された。メンターに関する意識については、メンターを紹介する説明書を添付した上で、認知度、メンターへの相談希望の有無と相談する場合の気がかり、自身がメンターになる意志の有無とその理由、自身がメンターとなり他の家族を支援する上での気がかりについて尋ねた。  
メンターへの相談希望の要因を分析するために、相談希望の有無別に全変数とのクロス集計を行い、 $\chi^2$ 検定もしくはFisherの直接確率検定を行った。平均値の差の検定には等分散性を確認した上で、分散分析を用いた。分散分析で有意差が見られた場合は多重比較を行った。相談希望有無別の2群を従属変数、p値が0.1未満であった項目の中から独立変数を選び、ロジスティック回帰分析を行った。統計解析はSPSSver24を使用し、有意水準は5%未満としたが10%未満を傾向があると表記した。
- (2) 診断後間もない発達障害児の親に対して継続的にグループ相談会での相談活動を行ったペアレント・メンターについて、対象はメンター養成講座を受講後、メンターとしてグループ相談会に参加経験のある発達障害児者の親11人とした。2-4人単位でグループインタビューを4回行った。インタビュー内容は、相談活動を通して、経験したこと、活動から得られたこと、自身の子育てや家族の変化、活動することの負担感、必要とする支援についての考えや思いである。発言内容について参加者の同意を得た上で、ICレコーダーに録音し逐語録を作成した。メンターが相談活動を通じて経験している内容とその経験によりメンター自身の意識や生活、家族にどのような変化があったかに着目して、意味の最小単位のコード化、類似したコードからサブカテゴリ化、カテゴリ化を行い、カテゴリ間関係を分析した。
- (3) 倫理的配慮として、所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施し、個人情報保護に関して細心の注意を払った。

#### 4. 研究成果

- (1) 質問紙の回答があったのは106人(回収率58.9%)であり、有効回答102人(有効回答率96.2%)を分析対象とした。行動上の困りごとは87人(85.3%)にあり、年齢別の有意差は見られなかった。困りごとの内容は、「こだわりが強い」「周囲に合わせて行動できない」「場面の切り替えが困難」「落ち着きがない」が40%以上に見られた。「大声をあげる」「場の空気が読めない」「会話がかみ合わない」は30%以上に見られ、中でも「場の空気が読めない」「会話がかみ合わない」は有意差はないものの4歳に多い傾向であった。「同じ行動を繰り返す」は3歳に多く、有意差が見られた。生活面の困りごとは95人(93.1%)にあり、3歳では100%であった。困りごとの内容は食事が約70%にあり、排泄、着替えがそれに続いた。排泄は4歳に多く、有意差が見られた。親自身の困りごとは84人(82.4%)にあり、内容は、「子どもの将来を考えると不安になる」が70%を超えた。児の年齢別に有意差は見られなかったが、「心身ともに疲れる」は4歳でやや多い傾向であった。行動上・生活面・親自身の3領域すべてに困りごとがあったのは73人(71.6%)で児の年齢別に差異は見られなかった(表1)。

表1 対象の概要と児の行動上・生活面及び親自身の困りごと 人(%)

児の年齢		計 N=102	3歳 n=35	4歳 n=41	5歳 n=26	p
回答者	母親	97 (95.1)	34 (97.1)	38 (92.7)	25 (96.2)	0.641
児の性別	男児	81 (79.4)	27 (77.1)	36 (87.8)	18 (69.2)	0.172
発達障害の診断	あり	51 (50.0)	11 (31.4)	24 (58.5)	16 (61.5)	0.020
	# 調整済み残差		-2.8	1.5	1.3	
発達障害のあるきょうだい児がいる		11 (10.8)	2 (5.7)	7 (17.1)	2 (7.7)	0.228
児の行動上の困りごとがある		87 (85.3)	31 (88.6)	34 (82.9)	22 (84.6)	0.782
	こだわりが強い	46 (45.1)	17 (48.6)	20 (48.8)	9 (34.6)	0.408
	周囲に合わせて行動できない	44 (43.1)	16 (45.7)	19 (46.3)	9 (34.6)	0.544
	場面の切り替えが困難	44 (43.1)	18 (51.4)	17 (41.5)	9 (34.6)	0.467
	落ち着きがない	43 (42.2)	15 (42.9)	21 (51.2)	7 (26.9)	0.090
	大声をあげる	36 (35.3)	9 (25.7)	17 (41.5)	10 (38.5)	0.208
児の行動上の困りごとの内容	場の空気が読めない	35 (34.3)	10 (28.6)	19 (46.3)	6 (23.1)	0.054
	会話がかみ合わない	32 (31.4)	11 (31.4)	17 (41.5)	4 (15.4)	0.054
	パニックを起こす	30 (29.4)	8 (22.9)	15 (36.6)	7 (26.9)	0.287
	人や物にあたる	28 (27.5)	10 (28.6)	13 (31.7)	5 (19.2)	0.479
	音に敏感	28 (27.5)	10 (28.6)	11 (26.8)	7 (26.9)	0.999
	友達とのかかわり方	26 (25.5)	10 (28.6)	12 (29.3)	4 (15.4)	0.369
	同じ行動を繰り返す	20 (19.6)	12 (34.3)	6 (14.6)	2 (7.7)	0.026
	# 調整済み残差		2.6	-0.9	-1.8	
児の生活面の困りごとがある		95 (93.1)	35 (100.0)	37 (90.2)	23 (88.5)	0.146
	食事	71 (69.6)	30 (85.7)	26 (63.4)	15 (57.7)	0.155
	排泄	63 (61.8)	22 (62.9)	30 (73.2)	11 (42.3)	0.026
	# 調整済み残差		-0.5	2.4	-2.2	
児の生活面の困りごとの内容	着替え	62 (60.8)	22 (62.9)	28 (68.3)	12 (46.2)	0.166
	整理整頓	46 (45.1)	14 (40.0)	23 (56.1)	9 (34.6)	0.101
	身だしなみ	35 (34.3)	10 (28.6)	16 (39.0)	9 (34.6)	0.421
	活動	33 (32.4)	9 (25.7)	14 (34.1)	10 (38.5)	0.335
	入浴	32 (31.4)	9 (25.7)	14 (34.1)	9 (34.6)	0.452
親自身の困りごとがある		84 (82.4)	30 (85.7)	33 (80.5)	21 (80.8)	0.813
親自身の困りごとの内容	子どもの将来を考えると不安	75 (73.5)	26 (74.3)	31 (75.6)	18 (69.2)	0.537
	きょうだいへの負担	28 (27.5)	11 (31.4)	13 (31.7)	4 (15.4)	0.269
	心身ともに疲れる	27 (26.5)	8 (22.9)	15 (36.6)	4 (15.4)	0.093
児の行動上・生活面・親自身の3領域すべてに困りごとがある		73 (71.6)	26 (74.3)	29 (70.7)	18 (69.2)	0.900
発達の気がかりが最初に生じた時の年齢 (mean ± SD)		1.1 ± 0.8	0.9 ± 0.7	1.2 ± 0.8	1.3 ± 1.0	0.073
他人から発達について気になると言われたことがある		67 (65.7)	22 (62.9)	24 (58.5)	21 (80.8)	0.189
最初に他人から言われた時の年齢 (mean ± SD)		1.5 ± 0.9	1.4 ± 0.7	1.5 ± 0.9	1.9 ± 1.0	0.173
子育てが一番大変だった時の年齢 (mean ± SD)		2.0 ± 1.0	1.8 ± 0.9	2.0 ± 1.1	2.1 ± 1.2	0.581
子育てが一番大変だった時を10とした場合の現在の大変さ (mean ± SD)		5.7 ± 2.5	6.0 ± 2.4	6.0 ± 2.5	4.7 ± 2.7	0.096

\*児の年齢別に 2検定を行い、有意差の認められた場合には残差分析を行った。# 調整済み残差

\*\*平均値の差の検定は、Leveneの等分散性の検定により、 $p > 0.05$ であることを確認後、分散分析を行った。

発達の気がかりが最初に生じた時の年齢は、 $1.1 \pm 0.8$  歳で、3歳にやや低い年齢の傾向であった。他人から発達について気になると言われたことがあったのは67人(65.7%)であり、最初に言われた時の年齢は、 $1.5 \pm 0.9$  歳であった。子育てが一番大変であった時の年齢は、 $2.0 \pm 1.0$  歳で、どの年齢も平均すると2歳であった。子育てが一番大変だった時を10とした場合の現在の大変さは $5.7 \pm 2.5$ で、5歳がやや低い傾向であった。

メンターの認知度は、「知っている」が18人(17.6%)、「名前は聞いたことがある」が17人(16.7%)、「知らない」が66人(64.7%)であった。メンターを紹介する説明書を添付した上で、メンターに相談希望があったのは84人(82.4%)、なかったのは16人(15.7%)、無回答が2人であった。最も多い相談希望内容は園での生活、就学に関する悩みで、生活面の問題に関する悩み、行動上の問題に関する悩みと続いた。メンターに相談する場合の気がかりについては、「支援内容がわからない」が51人(50.0%)、「相手との人間関係が不安」が50人(49.0%)と約半数に上った。いずれも年齢別の有意差は見られなかった。

「機会があればメンターとなり他の家族の相談にのりたいか」に「はい」と回答したのは43人(42.2%)、「いいえ」と回答したのは57人(55.9%)、無回答が2人であった。「はい」と回答した理由は、「自分と同じような悩みを持つ人の力になりたい」が最も多く、「いいえ」と回答した理由は「自分自身のことで精いっぱい」や「荷が重い」が多かった。メンターとなり他の家族を支援する場合の気がかりについては、サポートする上での情報・知識不足、ノウハウ経験不足、責任が重い、相手との信頼関係構築の不安が多かった。年齢別に有意差があったのは精神的負担、責任が重い、時間的負担で3歳に多く、精神的負担は5歳に少なかった(表2)。

表2 ペアレント・メンターに関する意識

児の年齢	計	3歳	4歳	5歳	p
	N=102	n=35	n=41	n=26	
メンターの認知度					
知っている	18 (17.6)	3 (8.6)	11 (26.8)	4 (15.4)	
名前は聞いたことがある	17 (16.7)	7 (20.0)	4 (9.8)	6 (23.1)	0.191
知らない	66 (64.7)	25 (71.4)	26 (63.4)	15 (57.7)	
メンターへの相談希望あり					
園での生活・就学に関する悩み	84 (82.4)	28 (80.0)	33 (80.5)	23 (88.5)	0.433
希望する	園での生活・就学に関する悩み				
	65 (63.7)	21 (60.0)	27 (65.9)	17 (65.4)	0.733
希望する	生活面の問題に関する悩み				
	47 (46.1)	15 (42.9)	22 (53.7)	10 (38.5)	0.217
相談内容	行動上の問題に関する悩み				
	45 (44.1)	16 (45.7)	19 (46.3)	10 (38.5)	0.522
	家族関係				
	14 (13.7)	2 (5.7)	6 (14.6)	6 (23.1)	0.187
メンターに相談する場合の気がかり					
支援内容が分からない	51 (50.0)	22 (62.9)	15 (36.6)	14 (53.8)	0.067
相手との人間関係が不安	50 (49.0)	20 (57.1)	21 (51.2)	9 (34.6)	0.206
秘密が守られるか心配	27 (26.5)	10 (28.6)	9 (22.0)	8 (30.8)	0.685
相談に期待が持てない	11 (10.8)	4 (11.4)	4 (9.8)	3 (11.5)	0.963
機会があればメンターとなり他の家族の相談にのりたいか「はい」					
	43 (42.2)	10 (28.6)	21 (51.2)	12 (46.2)	0.139
その理由	自分と同じような悩みを持つ人の力になりたい				
	39 (38.2)	10 (19.0)	19 (46.3)	10 (38.5)	0.407
	人の役に立つことがしたい				
	8 (7.8)	0 (0.0)	5 (12.2)	3 (11.5)	0.225
機会があればメンターとなり他の家族の相談にのりたいか「いいえ」					
	57 (55.9)	24 (68.6)	20 (48.8)	13 (50.0)	0.139
その理由	自分自身のことで精いっぱい				
	38 (37.3)	19 (54.3)	13 (31.7)	6 (23.1)	0.124
	荷が重い				
	33 (32.4)	16 (45.7)	12 (29.3)	5 (19.2)	0.246
メンターとなり他の家族を支援する場合の気がかり					
サポートする上での情報・知識不足	74 (72.5)	30 (85.7)	25 (61.0)	19 (73.1)	0.055
ノウハウ・経験不足	71 (69.6)	26 (74.3)	27 (65.9)	18 (69.2)	0.727
責任が重い	51 (50.0)	24 (68.6)	17 (41.5)	10 (38.5)	0.025
# 調整済み残差		2.7	-1.4	-1.4	
相手との信頼関係構築の不安	45 (44.1)	17 (48.6)	17 (41.5)	11 (42.3)	0.805
時間的負担	38 (37.3)	19 (54.3)	11 (26.8)	8 (30.8)	0.035
# 調整済み残差		2.6	-1.8	-0.8	
精神的負担	21 (20.6)	13 (37.1)	7 (17.1)	1 (3.8)	0.005
# 調整済み残差		3	-0.7	-2.4	

\*児の年齢別に 2検定を行い、有意差の認められた場合には残差分析を行った。# 調整済み残差

メンターへの相談希望がある者に有意に多かったのは、発達障害の診断がある( $p=0.024$ )、相談相手との人間関係が不安( $p=0.006$ )、メンターとなり他の家族の相談にのりたい( $p=0.001$ )であった。相談希望者に多い傾向があったのは、児の行動上の困りごとがある( $p=0.061$ )、自分と同じような悩みを持つ人の力になりたい( $p=0.093$ )であった。メンターへの相談希望の有無を従属変数とし、発達障害の診断、児の行動上の困りごと、相談相手との人間関係が不安、メンターとなり他の家族の相談にのる意志の4項目を独立変数として二項ロジスティック回帰分析に投入した。その結果、メンターへの相談希望は、メンターとなり他の家族の相談にのりたい( $OR=13.027, 95\%CI:1.608 \sim 105.537$ )、相談相手との人間関係が不安( $OR=4.393, 95\%CI:1.099 \sim 17.556$ )であった。メンターへの相談希望がある親はない親に比べて、メンターとなり他の家族の相談にのりたい者が13倍、相談相手との人間関係を不安に思う者が4倍に上った。メンターとなり他の家族の相談にのる意志があることはメンターへの相談希望と最も関連があった(表3、表4)。

保健活動の中で発達段階や周囲との関係によって感じる困難さに寄り添い支援するとともに、安心してメンターに相談できる場を設定し、将来メンターとなることも視野に入れて支援する必要性が示唆された。

表3 ペアレント・メンターへの相談希望の有無別分析のうちp値が0.1未満であった項目 人(%)

ペアレント・メンターへの相談希望	あり	なし	p
	n=84	n=16	
発達障害の診断あり	46 (54.8)	4 (25.0)	0.024
児の行動上の困りごとがある	74 (88.1)	11 (68.8)	0.061
相談相手との人間関係が不安	47 (56.0)	3 (18.8)	0.006
メンターとなり他の家族の相談にのりたい	42 (50.0)	1 (6.3)	0.001
自分と同じような悩みを持つ人の力になりたい	39 (19.0)	0 (0.0)	0.093

\*ペアレント・メンターへの相談希望の有無別にFisherの直接確率検定を用いた。

表4 ペアレント・メンターへの相談希望の有無に関連する要因

関連する要因	有意確率	オッズ比	信頼区間
相談相手との人間関係が不安	1.480	0.036	4.393 1.099-17.556
メンターとなり他の家族の相談にのりたい	2.567	0.016	13.027 1.608-105.537

ロジスティック回帰分析：変数増加法ステップワイズ

ステップワイズによる投入は0.05、除去は0.1とした。

投入した変数は、以下である。

- 「発達障害の診断あり」「児の行動上の困りごとがある」「相談相手との人間関係が不安」
- 「メンターとなり他の家族の相談にのりたい」

- (2) グループ相談会でメンターは、「相談者が語りやすい環境をつくる」、傾聴や共感を伴いながら「相談者の状況を確認して困難さに寄り添う」「自らの体験と重ね合わせる」「改めて自らの子育てを振り返る」体験をしていた。「相談者と自分との違いを意識して対応する」「相手に合わせて経験や知識を伝える」「相談の体験から達成感を感じる」一方、「障害や地域が異なると対応に負担を感じる」「自分の考える支援と自らの支援の現実にギャップを感じる」こともあった。メンター自身も子育ての途中であり、「相談活動への家族の協力」「メンターとして以前に増して子育てに前向きに取り組む」など自分や家族の変化も生じていた。

メンターは相談活動でメンティの相談内容から自分自身の子育てを振り返り、当時は言語化できていなかったことに改めて気づくなど、メンター自身の気づきを促し、発達障害のあるわが子との生活に肯定的な影響があることが考えられた。一方、自らの限界を感じたり、困難感を感じる等課題も明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 西嶋 真理子(愛媛大学 大学院医学系研究科), 西本絵美, 齋藤 希望, 柴 珠実, 増田 裕美, 達川まどか, 仲野由香利	4. 巻 22巻3号
2. 論文標題 療育機関に通所する発達障害児の親が感じる困りごととペアレント・メンターへの相談希望に関連する要因	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本地域看護学会誌(1346-9657)22巻3号 Page34-43(2019.12)	6. 最初と最後の頁 34-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西嶋 真理子(愛媛大学 大学院医学系研究科), 柴 珠実, 齋藤 希望, 増田 裕美, 西本 絵美, 松浦 仁美	4. 巻 21巻1号
2. 論文標題 発達障害児の親を対象に行った前向き子育てプログラム(Positive Parenting Program; トリプルP)の効果と地域での導入の検討 ステッピングストーンズ・トリプルP(Stepping Stones Triple P)実施前後比較より	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本地域看護学会誌(1346-9657)21巻1号 Page40-49(2018.04)	6. 最初と最後の頁 40-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 増田 裕美(聖カタリナ大学 人間健康福祉学部), 西嶋 真理子	4. 巻 21巻3号
2. 論文標題 前向き子育てプログラムに参加した学童期以降の発達障がい児の親の子育てについての認知と行動の変化	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本地域看護学会誌(1346-9657)21巻3号 Page49-55(2018.12)	6. 最初と最後の頁 49-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西嶋真理子, 達川まどか, 柴 珠実, 増田裕美, 仲野由香利
2. 発表標題 発達障害児者の親が同じ立場の親への相談 活動を通じて得られる体験 メンターがペアレント・メンターカフェ活動を行うこと の意味
3. 学会等名 日本地域看護学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 達川まどか、西嶋真理子、増田裕美、仲野由香利、柴珠実、齋藤希望
2. 発表標題 ステッピングストーンズ・トリプルが発達障がいの子どもの持つ母親に与える効果
3. 学会等名 日本公衆衛生看護学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西嶋真理子 増田裕美 柴珠実 達川まどか 仲野由香利 西本絵美 齋藤希望 松浦仁美 星田ゆかり 田中輝和
2. 発表標題 愛媛県におけるトリプルPの活動報告-発達障害児の親支援からスタートし、地域子育て支援やメンター活動へ-
3. 学会等名 第5回トリプルPジャパン研究会東京大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西嶋真理子、増田裕美、仲野由香利、柴珠実、齋藤希望
2. 発表標題 地域の子育て拠点の保育士と共同で行ったグループ・トリプルPの介入効果
3. 学会等名 日本地域看護学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西嶋真理子、増田裕美、達川まどか、柴珠実、齋藤希望、仲野由香利、西本絵美2)
2. 発表標題 未就学の発達障害児の親が感じる困りごととペアレント・メンターへのニーズ
3. 学会等名 日本地域看護学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 達川まどか 西嶋真理子 増田裕美 齋藤希望 仲野由香利 柴珠実
2. 発表標題 ステップストーンズトリプルPを受講することによる母親の子どもへの関わり方の変化
3. 学会等名 日本地域看護学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西嶋真理子、齋藤希望、西本絵美、増田裕美、柴珠実、武智真耶、田中輝和
2. 発表標題 トリプルPからペアレント・メンターカフェ開催に至る過程で見出された発達障害児の親のニーズ（第1報）トリプルPフォローアップセミナーにおける発言内容の分析
3. 学会等名 平成29年度愛媛県地域保健研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤希望、西本絵美、田中輝和、増田裕美、柴珠実、西嶋真理子
2. 発表標題 トリプルPからペアレント・メンターカフェ開催に至る過程で見出された発達障害児の親のニーズ（第2報）障がい児の親によるペアレント・メンターカフェの実践報告
3. 学会等名 平成29年度愛媛県地域保健研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 増田裕美、西嶋真理子、田中輝和
2. 発表標題 発達に問題を抱える学童期以上の子どもを持つ親のグループトリプルPにおける子育てについての気づき
3. 学会等名 第3回トリプルPジャパン研究会四国大会
4. 発表年 2017年



1. 発表者名 柴珠実、齋藤希望、増田裕美、田中輝和、西本絵美、西嶋真理子
2. 発表標題 トリプルPプログラムがファシリテーターに及ぼす変化
3. 学会等名 第3回トリプルPジャパン研究会四国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西嶋真理子、柴珠実、齋藤希望、西本絵美、増田裕美、松浦仁美
2. 発表標題 トリプルP修了者がペアレント・メンターとしての活動を行う上での心配ごとや強み、専門職に望む支援
3. 学会等名 日本地域看護学会第20回学術集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 猪股久美、岩本里織、浦橋久美子、大越扶貴、大木幸子、岡久玲子、金子仁子、北村真弓、草野恵美子、工藤恵子、合田加代子、標美奈子、鈴木晃、多田美由貴、西嶋真理子、野原真理、林友紗、速水裕子、森田桂、山口佳子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 クオリティケア	5. 総ページ数 196
3. 書名 公衆衛生看護活動論技術演習第3版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>第8回日本公衆衛生看護学会学術集会(2020.1.12)において「発達障がい児の親支援を推進する地域活動のあり方をさぐる-他職種連携で行うペアレントトレーニングと先輩親とタッグを組んだペアレント・メンター活動」と題した学術集会指定ワークショップを行った。世話人は、西嶋真理子、達川まどか、柴珠実、増田裕美、仲野由香利、西本絵美である。</p> <p>発達障がい児の親であるペアレント・メンター、地域の子育て拠点で我々と連携してペアレントトレーニングに取り組む公立保育園の保育士、地域性を活かした楽しい親支援活動を行っている保健師による話題提供が行われた。会場の市民や専門職の関心は高く、熱心な意見交換が行われた。</p>
---

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	齋藤 希望  (Saito Nozomu)  (40749800)	愛媛大学・医学系研究科・助教    (16301)	
研究分担者	達川 まどか  (Tatsukawa Madoka)  (20849690)	愛媛大学・医学系研究科・助教    (16301)	
研究分担者	柴 珠実  (Shiba Tamami)  (60382397)	愛媛大学・医学系研究科・講師    (16301)	